

泌 尿 器 科 紀 要

第 16 巻 第 8 号

1970年8月

随 想

精 神 神 経 科 と Onanie

広島大学名誉教授 小 沼 十 寸 穂

私の元の教室では、ことに神経症の症候（不安症・恐怖症・強迫症など）の根底に性的問題が蟠居しているものがきわめて多いし、性的態度というものは、全人格的表現の根幹をなしているので、精神分析学的にも解明したいという学問的態度から、少なくとも私は、その立場上と老医であるという接触可能性を利して、すべての患者について、その性的な事गरを聴き出すことに慣れた。それを私は教室の河村にまとめてもらったのであるが、教室業績集第7集に連載してある。今そのうちの泌尿器科学に縁のある Onanie に関してのものを紹介してみたい。

(1)

文献的展望であるが、第1の問題は、Onanie の頻度について、アメリカでは男性の92%（女性の60%）、ドイツの男性では16才までに83%、ソビエトでは同じく15才までに57.9%、日本では男性の15才までに52.4~68.5%、大学生で95%などが Onanie の体験をもつとされている。

性交欲を持ち始めた年令についての日本の統計によれば、男性762名中、15才 17.3%、16才 16.2%、17才 22.8%（14才 6.6%、18才 7.0%で、それ以前、以後のものは激減する。女性では二相性）であるから、15~17才をピークとして、必然的に Onanie への契機が生ずると見ていい。

第2の問題は、Onanie によって神経症が惹起されるかということであるが、文献上意外に感ぜられるのは、それを否定しているのが精神医学上の常識的見解であるという発見である。Onanie が全く正常性交を否定するに至る場合というのは、文献に見当らぬが、正常な性交で異性愛が満たされる可能性を持ちながらの既婚者の Onanist というのがある。神経症、精神病の症候としての過度の Onanie（ことに後者の場合は、病的 Onanie の様相をとることがある）、頻度が過ぎて性的神経衰弱を生ずることは周知である。ついでながら neurasthenia sexualis という¹と疲憊性性的神経衰弱という概念を端的に示しやすいが、全く同じ語源ながら asthenia neurosexualis というのがこのごろ使われているけれども、これは素質的な性交機能萎弱をさして概念としているので、すこし違う。

(2)

およそ健康者における Onanie 自体に因する障害は問題とするに足りぬという考え方と精神医学的常識的な説明として、それによる身体ないし性器毀損への期待的不安と罪業感

をいなくことそれ自身が、すでに神経症的なのであるという考え方とそういう不安や罪業感を感じるのは、神経症的素質がすでに存在しているからだという考え方がある。フロイドも、その Onanie 論という著書において、Onanie により神経症を生ずるや否やは答ええずとし、神経症の準備状態形成としての意義のみ述べているにとどまっている。つまりこれは、なかなかむずかしい問題を含んでいるのである。

ところで精神分析学で指摘しているものに「Onanie による当日性神経衰弱 Eintagsneurasthenie」というのがあって、これは Onanie 後、その当日限り神経衰弱的で、夕刻になるとそれが消えてしまうものをいうのであるが、これは同学説では、身体ないし性器毀損不安（さらに去勢不安）による精神反応性のものだと解釈しているようであるが、私によると、それは Onanie の生理学上の不自然性による自律神経失調症候によるものであって、1日くらいの持続で夕刻になると、再適応によって、それが消退するに至るものである（もちろん上記の精神的要件も関与するが）。つまり病態生理的必然性によるものと理解するのである。

Onanie の生理機能上の不自然性（性交によって対象による全人間的——心身の——態度が求められず、局所性生理を空想によって仮性全人間性問題に敷衍するという Onanie 機制の不自然さ）が、中枢神経系の機能失調を一時的にもたらすによる症候で、それは健康な若者ならせいぜい1日の経過で回復するものであるからである。

この失調をほとんど感じないものから、それを強く感ずるものまでであるのは、それは体質・素質の差であることであろうが、しかもこのメカニズムによる何ほどの失調は、万人必至のものであらうと思う。このさい男の性感帯の限局性の問題もあり、女性の場合とは、少しく事を異にするものであらう。

そうして私によれば、この Eintagsneurasthenie の最良の治法は、翌夜の熟眠をまてばよいのであって、薬剤によるを要しないし、薬剤の効は少なく、また薬剤によってはならぬのではないかと思うのである。ただしこういうことの治療方法などについての臨床的体験を系統的に積み、Eintagsneurasthenie の本態とそれにつながる neurasthenia sexualis, Impotenz などの本態に精神医学的に迫る機会というものは、そうは思いながらもなかなかないのを遺憾とする。それには臨床的性科学というものの確立を望みたい。

附記 広島大学医学部神経精神医学教室業績集 第7集（性問題の特輯）は、同教室あて請求せられれば、頒たれるであらう。